

日曜日の消し方

大垣北高校 2年 吉川 結衣

こんなことを言ったら、全国の学生や社会人に怒られるかもしれないけれど、——私は今週の日曜日を消したい。

「消せるわけないじゃん」

前の席に座る風香は、もつともなことを言っただけで笑う。それくらい、私だつてもちろんわかっている。

「そんなに嫌なら、仮病で休んじゃえばいいのに」

「それも違うんだな……」

自分だけ休んでも良いことは何もないだろう。日曜日がカレンダーからいなくなつてしまつて、全員平等がいい。

「そんな夢見たこと言ってる暇あるなら、ちよつとでも勉強しなよ」

彼女の言うことはどう考えても正論だった。逆らう隙もない。

高三の秋。今週の日曜日の模試は、まさにラストチャンス。ついに現実を突きつけられてしまふ。できることならまだ受けたくない。

次の模試で巻き返すから、なんて言葉で親と先生を騙し続けるのは、もう限界だ。

私が身分違いの大学を志望するようになった原因は、ほかならぬ風香だった。

去年の夏休み、私の志望大と風香の志望大、それぞれのオープンキャンパスに二人で行くことになった。

先に行った自分の志望大が、イメージと少し違ったのもあるかもしれない。——次の日に行ったオープンキャンパスで、風香の志望大学に憧れの気持ちが芽生えてしまった。

それまで、自分の偏差値で手が届く範囲の大学しか考えてこなかったから、自分が勉強したいこととこんなにもマッチしている大学があるなんて気づかなかつた。もう少し早かつたら、

まだ間に合ったかもしれない。遅かった。逆転するには、遅すぎた。

一年以上経った今でも、まだ指先しか届いていない。そろそろ、現実を受け入れるしかないのだろう。とても怖いけれど。

家に帰って勉強机に向かうと、壁にかけられたカレンダーが嫌でも目に入る。その日の曜日も。

もうどうしようもないので、あきらめて英単語でも覚えることにする。赤シートで日本語の部分を隠し、ひとつひとつ意味を確認していく。赤シートで赤い文字を、隠して、……あ。赤シートを目の前にかざしたまま、壁のカレンダーを見る。

日曜日、消えた。

日曜日が、赤い文字で数字が書かれている日曜日だけが、カレンダーの中からきれいにいなくなった。

この赤シートを外せば、日曜日はまた現れてしまう。私は少しの間、赤シート越しにカレンダーを見つめた。

でも、仕方ないか。私は徐々に日曜日を受け入れ始めていた。赤シートで隠すのは、そこが重要な部分だからだ。日曜日も、多くの人にとっては大切なものだろう。きっと本当は、私にとっつても。

目の前の赤シートを外し、日曜日のあるカレンダーを少しの間見つめてから、もう一度単語帳に向かった。

頑張るか、日曜日。